

三河 アララギ

平成二十五年

八月号

第六十卷 第八号



ニューヨーク日記(82) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

July 6, 2013 : Sunset cruise on the Hudson

Blue Shoe Diaries



暑い! のでボートに乗って涼もうと思ってワインの出るサンセットクルーズにおやつ持って友達集めてまた乗ってきました。風が気持ちよかった~それにちょっと離れて見るマンハッタン綺麗!自由の女神もサンセットに見るととてもドラマチックでいい感じ。

It's hot and humid. It is summer after all. So to cool down a bit, we decided to get on a sunset cruise on the Hudson. The breeze felt so good and the view, fantastic! The unlimited flowing bubbly definitely helped too. Not to mention the charcuterie we brought on board as a snack to go along with it. Feeling like this is summer done right!

目次

第六十卷第八号(通卷七一六号)

表紙	こもればウバユリ
ニューヨーク日記(82)	
感銘歌 御津磯夫第十歌集	
歌集「スモン」	
「こころ」	
和すだれ	
紫陽花	
富士は素晴し	
試歩	
手ぶらで行くな	
さ緑	
奥三河の里	
まぶしき光	
麦秋	
ヒョウモンダコ	
水無月	
雨乞ひ	
猫	
米寿	
いかにおはさん	
楽しみて	
ギネス	
ハカタノカラクサ	
空の青	
八重子さん	
つゆとなる雨	
野良猫	
本宮山	

今泉	由利	(1)
Blue Shoe	(2)	()
大須賀寿恵	(4)	()
岡本八千代	(6)	()
今泉	由利	(7)
弓谷	久子	(8)
青木	玉枝	(9)
佐藤	喜仙	(10)
内藤	志げ	(11)
安藤	和代	(12)
林	伊佐子	(13)
伊藤	忠男	(14)
胃甲	節子	(15)
鈴木	孝雄	(16)
近藤	映子	(17)
清澤	範子	(18)
伊与田	広子	(19)
足立	晴代	(20)
吉野	嘉子	(21)
半田	うめ子	(22)
杉浦	恵美子	(23)
平松	裕子	(24)
小野	可南子	(25)
山口	千恵子	(26)
夏目	勝弘	(27)
秋山	逸穂	(28)
白井	信昭	()

悪用なきを	阿部	淑子	(29)
夏至まじか	富岡	和子	(29)
『ことよせ』	いーはとぶ	()	()
『俳句』	植村	公女	(31)
私の一首	伊藤	忠男	(33)
	小野	可南子	(34)
	清澤	範子	(35)
	平松	裕子	(35)
	大橋	望彦	(36)
	今泉	雅勝	(38)
ある自然科学者の手記(15)	一石	(40)	()
絹の話(33)	鮫島	満	(42)
物理学者と詩歌の世界(43)	山本	紀久雄	(44)
短歌に詠まれた茂吉	佐藤	喜仙	(48)
楽しい時間(9)	夏目	勝弘	(49)
贈呈誌	貫名	海屋資料館	(50)
子規の短歌革新とアララギの歌人(14)	岡本	八千代	(52)
「鍼の如く」其の四	今泉	由利	(53)
「歴代天皇御製歌」(十四)	平松	温子	(55)
(十五)			()
「氷魚」のことから(15)			()
ことのはスケッチ(416)			()
編集室だより(二〇一三年六月)			()
和菓子街道(82)			()
お知らせ・編集後記・三河アララギ規定			()

感 銘 歌

御津磯夫第十歌集 「御津磯夫歌集」

左右さだめもなくてめぐりめぐるわが臥す窓の朱の風車

P
43

雨なぞを歌ふことより見るよりも濡れつつ雨の中歩むべし

P
49

歌集 「スモン」

大須賀寿恵

君等二人といで湯の街に旅せしは去年の冬ぞと写真に記す

スカートの長きを若きらにうとまるる齡となりて春のすぎゆく

汝が無くばこの事務所は立ちゆかずとおだてられつつ二十年すぐ

「つゝ」

蒲郡 岡本八千代

梅雨の間のうす光さすこの部屋に静かにけふもわれ独りゐる

両開きの扉開けたればたちまちにほひくるかな本本の匂ひ

古き本新しき本のにほふかな我ありてけふもその部屋にゐる

わが持てる漱石復刻版のこの「こゝろ」取り出す時のしみじみとして

手を洗ひよく乾かして手にとれば嗚呼美しき篆書の「心」

いつまでも白きは白しアナベルとふ君がくれたるあぢさゐの花

寂しさのありといえどもその心消えつつもまた有りつつもして

先々のことは思はでたゞけふは梅雨ふる音をたのしみてをり

先づ歌稿を出しきたりてしづかにもひとり番茶の熱あつ啜る

かにかくに吾の一日の暮れてゆく暮れてゆきさへすればよしよし

和すだれ

東京 今泉 由利

朝の日も小鳥の囀り青い空世の中万端和すだれ越しに

いそぎんちやく岩から離れ逃げてゆくヒトデに追はるるその映像を
居ながらにキリマンジャロの頂上へ海には潜る今日の映像

植ゑられて間もなき稲の田んぼには八海山の全けく映る

大小のマゼラン雲の下方にてうとうとしをりリクライニングシート
漢詩よりいでこしリズムを口ずさむ静かに静かに和歌となりゆく

ひと莖に雄花と雌花と連らなれり天を向きつつやがてガマの穂

青高し群生ガマ原ゆくときは自ずと歌ふ因幡の白兔

千年の時を立ち立つクスの木と交差してゐる私の命

より遠くより深くまでより小さく知らむとしをりつくばに來たり

紫陽花

豊川 弓 谷 久 子

さきがけて花二つ三つ萼紫陽花その名も愛し隅田の花火

はやばやと入りたる梅雨はから梅雨かはや水不足とニュースは騒ぐ

思ひ出は紫陽花祭りの三ヶ根山今我が庭は紫陽花の庭

花祭りと浮き立つ山の奥深く人影無かりき戦犯の碑は

慰霊の碑に誘ひ呉れし元兵士の翁もすでに此の世を去りし

一週間と聞きし入院はや三週間姉の在さぬ家を見廻はる

挿し木より育てて幾年紫陽花のかくも殖えたり大輪の花

今日夏至と夕べ漸く気付きをり目まぐるしきよ時世と気候

紫陽花の花に始まり花にて終る足早に過ぐ我の水無月

明日よりの新聞小説待ち待ちし親鸞上人完結編ぞ

富士は素晴し

新城 青木玉枝

何処までも続く青田の風うけてあの杉林はやしまで手押車頼りて

杉木立の道はゆるくカーブして何処まで続くかしばらく立ちて

廻り道歩けば坂が見え出して何時もの道を通ればよかった

軒下の風鈴誰がつるしたのか年中音なく風にゆれをり

もたれいし石の肌ざわり紫陽花あじさいの花の一ひらに散りゆくを見て

富士山の世界遺産の決定に友と幾度仰ぎしあの富士

富士五湖をめぐりて写る富士の山忍野より見る富士は素晴し

流れゆく山並の霧ながめつつ雨音もなき梅雨の朝空

顧かへりみるに亡夫との生活なつかしき山里に独りの現世に比して

五年間綴りし日記宝物月日を巡りてなつかしく読む

試歩

東京 佐藤喜仙

試歩といふ言の葉耳にしたれども思ひもよらぬ我も試歩の身

造り滝の落下の音の澄みわたり滝の中より黒揚羽飛ぶ

楓の葉水にひらひら写りてをり我が心をも映しけるらむ

紅バラに寄り来る虫の多ければ我が娘にはけしてな寄りそ

白薔薇の毬は大きく清楚なる若き女性の胸に咲く花

園隅の暗闇照らす十葉に寺に籠れる尼僧を重ぬ

のだ藤の百畳の棚の花すだれその下ゆるり歩む老夫婦

プールサイド水着姿のめの子らは熱帯魚のごとひらひら群るる

鎌倉の翠微にけふる山寺の経文書写に我はとけこむ

清流の安曇野の川のほとりより前穂高岳の残雪を見る

手ぶらで行くな

豊川 内藤 志げ

六十年茄子を作りて今日知るは茄子の畑はたけに手ぶらで行くな

これ程に茄子には肥こやしのいるものか茄子の畑に手ぶらで行くな

夏椿丸き蕾の白く見え雨の好めるその雨を待つ

つくつくの松の新芽を手際よく夏目先生今日は庭師に

整いし松に新芽の見え初そめる梅雨の雨降る静かに降りぬ

大株の中より小さな花選び今教はりし水揚をする

敬老会のプラスバンドは恒例に青い山脈口づさみつつ

わが動きに紫陽花の雀翔び立ちぬ大きな花毬ゆらぐことなく

トンネルの二重の覆の裾を上げ宝物のごと西瓜を覗く

トンネルの内の西瓜なかはわれ一人なか在り処かを知りぬ秘密のごとく

さ 緑

豊川 安藤和代

用水の水の豊かに昨日けふさ緑そよぐ田も間近なり

千疋屋なら壱萬円ですとふメロン渥美の店に三個を求む

幼き日父と遊びし竹島にけふひとり来て海の声聞く

波に身をまかせて小さき海鳥も思ひているや父母のこと

鳥一羽海面すれすれ飛び去れば返す光は七色に散る

石巻山夜のとばりに包まるる雲雀は高くさえずりやまず

野にあらば野の花であれ十葉も玄関にあればまた気品あり

十葉をひと枝挿せばバラよりも牡丹の花より清しさが好き

残り咲く白つめ草をゆすりゆく風は夏色サンダル軽し

祖母の里田植え終えしか山やまの間にそよぐさ緑うかぶ

奥三河の里

岡崎 林 伊 佐 子

卵塊を産みて木の枝に登りゐるもりあを蛙を夫の指さす
沼池のしろき泡影ゆれてゐる蜥蜴に似たる守宮が見ゆる
舗装されず昔のままの土の道歩めばくぼむやはらかき土
笹百合の香気漂ふ山の道清楚な花が草蔭に咲く
ひと呼吸ごとに螢は光りとぶペンライト振るわが側に来つ
葉の裏にまはりて螢のいきづける光りは青く点滅をする
杉の間を彷徨ふ螢も寂しかり点滅しながら生死の光り
農繁期もゲートボールを楽しみぬ野良着姿の峡の老人
散策をしながら我流の体操して山の空気に活気あふるる
ふる里に帰へりて夫は草を刈り庭草取りて山家守らむ

まぶしき光

大阪 伊藤忠男

晴れやかな気持ちで走るハイウェイまぶしき光暑さひとしお

風の音鳥の鳴き声せせらぎに目覚まされるは贅沢な朝

不安なく気負いもせずに淡々と過ぎるこの日は幸せなりや

おのが体信じて描く明日の夢トンネル過ぎた今だからこそ

憂い無く確かな足音聞こえるはあの日の苦勞あらばこそ

湯につかり窓明け見える螢火の優雅な光今味わえる

時は今ありと思へば動き有りなしと思へば進むこと無し

アルバムの子ア色したこの写真何に思いを横顔の君

青空の下でカメラのキャップ取る霞む向こうは伊良湖岬か

美しき花は高嶺が相応しと言えど手に取り愛でしこそあれ

麦 秋

豊橋 胃 甲 節 子

麦秋の色美しき眺めにて短かき散歩に満てるしあはせ

柿畑の若葉煌く自己主張初夏の緑の中にて一際

広き下条の田植終りし美しさ田圃の中にて小麦熟れゆく

花の苗お隣より三鉢を戴きて梅雨細やかなる雨の庭植う

十七日今年始めての百合の花黄色も一輪咲きて嬉しき

お隣の雀の巣となる壁の穴今朝は中より蛇が顔出す

山梔の花は真白き良き香り雨に濡れても甘く薫りぬ

両親と夫を看取りし姉は今食欲も無く弱り果つると

お隣も前も我が家もドクダミの可憐な真白十字の花群

定家かずらは丁度見頃の嬉しさよやっとここ迄逢いに来ました

ヒヨウモンダコ

沼津 鈴木孝雄

梅雨晴間久方ぶりに富士山の筋様の雪山肌に映ゆ

梅雨さなか富士山頂に雪降り世界遺産の登録祝いか

キュウリの実片手でつまみ銚するトゲの痛さが心地よきかな

小松菜の葉上で団らん亀虫を問答無用と手の平一撃

役目終え地面に落ちた茄子の花紫の五弁なお気品高し

瓜島が鵜のコロニーと成り二年木々白く枯れ岩肌露出

食堂はヒョウモンダコで持ちきりに伊豆の海にも温暖化の波

まんまるの月の輝き明るすぎ自転車のライト消して漕ぐ

雨の中傘さし犬抱き歩く人ペット化進みワンちゃん迷惑

壁に貼る年暦の張りゆるやかに無機質の紙もいまだ命あり

水無月

名古屋 近藤映子

何んとしても孫の顔を見せたし我夫に日々祈りて

四十年休月無しに原稿を出し続く御津先生の教え護りて

水無月の晴れのベランダ亀二匹水槽に入ったり出たり

つゆニュースあれど雨など降りもせず水無月十日はや過ぎにけり

我夫を娘と共に見舞ひ来てテレビを付けて共に見る時

曇りても雨降る様子更になく見降す川はよどみをり

雨やみて見降す川に泥水のどくく早く流れて行く様

近頃の私の体のバランスは昔の様に意思通り動かず

わが夫を娘と見舞ふ一時に足をさすりて落ち付きぬ

わが夫の余命は日々過ぎ行きぬ忘れたくとも忘れられず

雨乞い

春日井 清澤 範子

菜園の胡瓜を取りぬ緑色濃くして持つ手にイボイボ痛し

初成りの胡瓜を取りぬ鉢にてパシッと音して真つ直ぐ胡瓜

椿の枝は日毎色濃く繁りたり武者隠し付くる部屋より眺む

境内はピースピースの鳥の声聞きある私の心も平和^{ピース}

手に痛きイボイボのまま神棚に供え終へたり初成りの胡瓜

娘の運転にてスーパーへ来ぬ吾の手引きつつメモを持ちつつ

小松菜の蒔き方夫に教へられ梅雨入りしたるに晴天の中

八王子神社に願ひをかける時静寂破るカラスの一声

初成りの胡瓜は真直ぐに垂れ下りその先には花つきしまま

空梅雨は深刻となりて雨乞ひの神事新聞の一面にあり

猫

豊橋 伊与田広子

岩合の世界猫歩き興味あり見逃のがさずテレビに見入る

岩合は猫をやさしく撫なでながら猫の視線で語りかくるなり

岩合の顔にジャレツク猫もありとつきにかはし笑っているなり

以前より居る猫次第に顔相の鋭くなりて恐ろしきなり

母が餌投げてやりたるに母の手に噛み付きたりて母悲鳴あげし

愛らしき此猫六匹子を産みしが人に甘へて子育て出来なき

野良猫はわが家の猫を追ひかけて座敷に上がり追ひまくるなり

鶏肉を一月分も持ちて来て冷凍室に詰めて行きたり

鶏肉は余り好かぬにどのように調理せむかと考ふるなり

鶏肉を味醂と醤油にて煮転がし海苔巻にして見むかと思ふ

米 寿

東京 足立晴代

健すこやかに米べいじゆ寿むかを迎むかえし今日けふの日に祝いわい集つどいし友ともに感かん謝しゃせり

あじさいも土つちによりて種いろ々に色いろとりどりの花はなを咲さかせり

水みず不足ぶそく五月ご雨あめ降ふりて堯よろこばし水みず辺べの草くさも息いきかえりたり

梅つゆ雨き来きたるさすがの暑あつさ汗あせ流ながる冷つめき水みづのうまさ一ひとしお

親おや鴨がもと子こ鴨がも九こ尾びの長ながき列れつ水みづ辺べの草くさにかくれ入りたり

友ともよりの小こ鉢ぼちのあぢさい大おお株かぶになりて咲さきたり隅す田みだの花はな火び

エーゼツト夫め婦おと揃そろいて通かよひしに夫つま轉ころばれて妻つまのおどろき

昨日ま迄まですこやかにかなりし友人とものにわかわかにゆきし天てん国こくへの旅たび

雪ゆき国くにの春はるの息いぶ吹きもさわやかにあまたの薔ば薇らの咲さき乱みだれたり

山やま々の若わか緑みどり濃こい緑みどり織おり交ませて絵えを見みる如ごとく美うしかりけり

いかにおはさん

東京 吉野嘉子

なつかしき去りゆく友をしのびつゝ、今いづろいていかにおわさん

今は亡きしたしき友のおもかげを我が胸ふかくしのびおさめん

ほがらかに親しく語りし我が友はとおい旅へと胸いたむらん

今は亡き親しき人々偲びつゝ、いづれは会える日を楽しみて

さそわれて和歌の世界に仲間入りつぎつぎ浮び楽しかりけり

年かさね過ぎこし日々をかえり見て昔をしのぶなすよしもがな

ひるねしてウトウトまどろむ夢の中気がついたらば夜のとぼりが

熱湯に気をとられつゝ、大失敗湯気にやかれて大やけどせし

始めての和歌のお稽古ためらいつつぎくゝ浮かび楽しかりけり

楽しみて

新城 半田うめ子

学校を休みし吾はやさしきの杉浦様にたすけられたり

何もかも知りて居りし杉浦様どうして鉄道へ入りたるかや

運動にすぐれて居りし杉浦様鉄道に入りての永眠したりき

楽しみて友は代り行く美しき紅藪椿を好みであるらし

小鳥等のにぎやかなりぬ紅椿数多の花に楽しかりきよ

夕暮れの西川辺に初夏の風さわやかなりぬ散歩を楽しむ

土産にと岡崎よりの鰻を時々頂く味のよかりしよ

若き日登り行きたりき楽しみて宮路山道思ひ出すなり

朝よりの鳴きてゐるなりにぎやかに数羽のからす杉林の中

ギネス

蒲郡 杉浦恵美子

満二年転送期間が過ぎにけり豊橋宛は何処にも届かぬ

この町に何十年も暮せども初めて来たぞ北浜海岸

我が夫がカヤック漕ぎて渡りたる大島見ゆるあんなに近く

三沢から来し人も居て山の仲間夫の法事に連なりて呉るる

法要の客も弟も帰りたり今またひとり仏間にぼつねん

三回忌まではと張り詰め過し来し二年の月日が解けてくやうな

スーパーにギネス見つけた一缶を思はず求めた夫好みしに

ギネスなら飲まむと言へば我が夫はグラスにゆっくり注ぎてくれぬ

我が夫よ貴方が逝きて三度目の初夏の黄昏ギネス飲みをり

美味しいと思ふ数口過ぎたれば夫の供養と自分に言ひ訳

ハカタノカラクサ

豊川 平松 裕子

目の前の真赤きダリアの大輪を愛でつつひとりの朝餉してをり

前をゆく車の中に自転車のサドル見えをり日曜日の朝

こみあぐる心をなか感じをり富士のニュースを聞きつつ走る

もじずりと歌に詠まれて千余年我が庭に咲くもじずりの花

山際の高速道を走りゆく実生の合歓の花咲き続く

合歓の花山法師の花両側に高速道を東に向かふ

そんな花持つて行ったら大変と言はれしその花ハカタノカラクサ

裏庭を覆ひつくせる白き花ハカタノカラクサは隣家にも伸ぶ

我がいなりをめっちゃうまかったよと言ふ客が今月もまた買ひて下さる

五角形を抜きて四隅の三角の油揚げを求め来る客のあり

空の青

豊川 小野可南子

病院の真白の中より逃れ出づ並木はみどり空青く澄む

人工の水晶体を我がものと見上げる今日のこの空の青

再生の水晶体に目映まばゆかり私を迎ふる花花花よ

病葉と白粒花の散らばへる我が墓の辺の朝を浄むる

菩提寺の山門砌のくちなしの香を聞く今朝のなほなほ清し

菩提寺の枝重おもと花のとき寿恵先生を想ふ縁よすがぞ

菩提樹の花に蜜吸ふミツバチの羽音の唸りにしばしの時を

水張田の苗の小さく揺るる道児童等送りて帰りぞゆかむ

水張田の列なす早苗の間よりカルガモ重々飛び発ちゆけり

素手なるを厭はずかまはず抜きやらむ朝露干ぬ間のこの夏の草

八重子さん

豊川 山口千恵子

植ゑ終へし早苗の列のたよりなげ夕べの風の吹き渡りゆく

植ゑられし田の原広く静まりて田毎に異なる濃き淡き青

根付きたる早苗の緑確かなり水加減もよし除草剤撒かむ

あかあかと熟れたる小麦の畑続く穂ずれの音さやさや聞こゆ

麦稈の匂ひを含む風の吹く刈りとり終はりし麦畑つづく

紫の色の見えつつ二日程斑入りの大輪花菖蒲開く

降り出だす雨は道路を濡らしゆくアスファルトより熱気上りくる

一つ家毀たれしあと広くして見なれし街の景色の変はる

美しき文字に書きし八重子さんのアララギ原稿無くはや一年

ふくよかに笑みたまひたるお顔のみ心に浮かぶ逝きて一年

つゆとなる雨

豊川 夏目勝弘

うつろなる耳に届くはぬばたまの闇を伝ひ来雨のしづく音^ね

一定のリズムに落つる雨しづく我が脈搏と同じなりけり

しとしとの闇の低きを伝ひくる少し高めの雫する音

軒下にころがりゐる空き缶に間ひとしく打ちゐる雫

部屋の闇にただひたすらに聞きてゐる一つリズムの雨のしづくを

いつしかに闇の去りたり続きゐる雨のしづくの確かなリズム

銀ネズの空より確かに降りてゐる梅雨入りとなる雨足見ええず

紫陽花の花の小さし緑色その花玉に点なす光り

定職のなくなりし我今日よりの梅雨となる雨楽しみゆかむ

郵便を雨より守り配ること工夫せしこと効^{こう}少なかりにき

野良猫

「招待」 秋山逸穂

私の住む家のとなりの空地にはどくだみ白く咲き満ちている

電車にて分倍河原にゆられゆく木木の青葉見上げなどして

霧雨に濡れゆく庭の松に這う昼顔に咲く一輪青し

野良猫はエノコログサに身を沈め熟睡しており木もれる日のもと

玉砂利を踏みしめ歩む両側の笹の植え込み葉を開きいる

本宮山

豊川 白井信昭

今日こそ屋根の漆喰を直さむともろもろの巢はそのままにして

東の山並遠し朝の陽は本宮山を赤らめてゐる

若黒松の芽吹き確かめ折り返す行在所跡の囀りのなか

「ちよつと」と言ふ時の長さも妻と息子と私の「ちよつと」に大き誤差あり

悪用なきを

横浜 阿部 淑子

雨上がり紫陽花の花色増しぬ幼き日の色なつかしき色
祖母の好まれし花くちなしを手向けて忍ぶ香りの満ちる
次々と科学の貴品生み出されひたすら祈る悪用なきを
帰り道坂で転びし我が夫は顔面大傷包帯痛まし

この思ひ如何に詠まむか推敲中夜蜘蛛一匹往き来してゐる

夏至まじか

東京 富岡 和子

鴨親子賑わい残り飛びたてり余韻にひたる弁天の池

明け方に朝霧立ちて百合匂うアジサイの青露草の数珠

夏至まじか薄暮に映える半夏生夕餉すませばふたたび庭へ

夕暮は花魁草の咲き競うかの道中はこれに倣うか

ふるなかものうぜんかつら艶やかに何やらうれし傘と似合うネ

『いよよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

夫と来て馬籠の坂を上りたり初夏の陽が石畳に照る

寝坊せしも慌てることは今はなく窓開けたれば文月の風

稲吉友江

取り除けし巢跡にはやもこの朝燕あした来たるかさへづりの声

軒下に菖蒲飾れりこの夕べひとつまたひとつ彼らとの思ひ出

鈴木美耶子

ひとときを陽気盛んに語らひぬ古き友らと昼下がりの茶房

濃緑のさやさやの風吹きてくるゴールドデンウイークのわが家の賑はひ

吉見幸子

外側の窓にぴったりとヤモリなり肌色うすきはまだ幼きか

わが家をも守りてくれる小さきヤモリ中に入れよとその戸そのまま

牧原正枝

若葉風すつと入りくる食卓に新聞のはしかすかにゆれて

孫からのうれしきたよりありそうなスズラン白き花匂ふ朝

岩瀬信子

微かなる風にゆれをり沙羅の木の根元の苔は幾年経るや

大徳寺うぐひす張りの廊下鳴る雅な人も踏み渡りしか

石田文子

雨音の中にカエルの声ひとつ去年と同じき声とも思ふ

黒々のブラックベリをけふは摘むわが指赤く染まりたるかな

山崎俊子

泣きじゃくる孫を我が胸に抱きけり育てくれたる親の労おもふ

二車線の県道沿ひの蜜柑畑に黙々と実を採る老の丸き背よ

水野絹子

いつ来るのか孫の来訪待ちわびしに玄関に聞こゆ「ただいま」の声

盆施餓鬼先祖の霊に手を合はすジャランジャランの聞こゆる中に

牧原規恵

そよ風の吹きくるけふの相見川船着橋には今も舟なく

遠からず老々介護のわれらかも思ひつつ今宵の宅配弁当

三田美奈子

『俳句』

ラッシュ時の車内放送梅雨じめり

植村公女

落語家のソフトモヒカン夏きざす

降り立てば故郷の風遠蛙

心まで洗い流せよ走梅雨

一石

生命の甦るとき梅雨の雨

青嵐やわが青春は遠くあり

牛馬や夏野のはての木曾の嶮

喜仙

庭の草余白のこさず夏深し

神宮の杜に歓声花は葉に

夕刊のあとも烈しく梅雨の雨

皓一

虎尾草の婉曲に垂れ草の中

雨模様又傘をさす半夏生

私の一首

あてもなく風に任せてただ浮かぶ浮雲見つめ羨ましきや

伊藤 忠 男

仕事のこと、子供のこと、同窓会の行事のこと、時間に追われる毎日です。忙しいからこそ生き甲斐があると、いつも同じ通勤の道を急ぎ足。ある晴れた日、普段は立ち止まることのない畑沿いの道で、何気なく空を見上げた。そこには白い雲が浮んでいた。風に任せて気楽に旅する姿にひかれ、少しの間足を止め眺めていた。穏やかに見える。今の自分とはかけ離れていても、心のどこかで、そんな生き方に憧れている自分がいるのでは。

畔の草枯れがれ見ゆるその下に緑たくまし萌えいだすもの

小野 可 南 子

この年の冬は、厳しい日が続き佐奈川土手の雑草もすっかり枯れ伏して、尚一層の寒さを感じておりました。佐奈川に沿う我が家の畑にも寒には寒肥、そして畑土に春耕を施すことも、寒さの中での作業です。

土手の枯草をそっと持ち上げてみるとその下土には、びっしりと緑の若芽が萌え始めて待ちに待った春を見つけました。

高速道の風にはためくのぼり旗父母はすでにゐまさぬ思ふ

平松 裕子

仕事でいつも使う高速道路で、辺りは田畑の真中という場所があります。その道の脇に強い風にはためくのぼり旗が一本だけ立っていました。早い速度で走っていましたので、何を告げているのかは分かりませんが、その光景を見たとき非常に孤独感を感じました。突拍子もなく父母（ちちはは）を持ってきたように思われるかもしれません。自分が自分の心境に近いものを感じました。

喘息にて伏しゐる吾に夫の焼く卵やきかな涙出で来ぬ

清澤 範子

自分の歌を幾度も詠み返しました。私は喘息も持病の一つになり、その都度かかりつけの医院へ点滴に通いました。夫はその様な私を元気づけ励まして今日に至りました。夫は高血圧、前立腺ガン、狭窄症の手術を受けた身でありながら、家族を愛し近隣にもやさしく、夫八十一歳、私七十五歳と年の差がありながら頑張る夫を尊敬し、感謝して幸せを感じる私です。夫の卵やきを涙をこらえながら美味しくいただきました。

ある自然科学者の手記 (15) 大橋望彦

『虫のあたま』

昆虫の脳はどの程度働いているのであろうか。この働き方が判ると、色々な事を利用することが出来るのではないであろうか。昆虫の種類は極めて多いのだから、中には、とてつもない機能を持っている奴もいるに違いない。こういう機能を発掘出来れば人間改造も面白くなる。などと、途方もない事を考え出したらば、少し昆虫のことを調べたくなってきた。其処で少し本を当たってみたところ、あるある、先人たちは、随分色々な事を研究していることが判った。でも、どんなに先端技術を駆使して、遺伝子の組み換え等で新しい生物的なものを作り出せるようになっても、とてつもない機能を持った生物を作り出せるような知見は仲々見付からない。これには、既成概念が働き、今知られている機能を他にも利用できないかと、考えることが先行するからではなからうか。そこで、もっとマクロなアプローチの仕方、例え

ば、昆虫の目玉は複眼であることはよく知られているが、人の目が二つしかないのに大変な機能の動員によって、正常なものの方が出来ているとすると、この複眼のそれぞれに入ってきた情報を瞬時に解析して、統一的な指令にまとめ行動に繋げる機構というものは、一体どうなっているのか、という事は余りよく知られていない。神経索が電氣的に信号解析をしていることは判っていて、その統一機構と行動の指令とは繋がっていない。子供の頃、トンボを捕まえるのに、手をぐるぐる回しながら近づいて、トンボがその手を見て目をくるくる回している隙に、サツと捕まえてしまう。これは何となく年上の子や、親から教わってきたことであるが、明らかに、複眼で見ている情報と、行動にラグ（間隙）があることを示している。ところが、蠅叩きでは、そんな事をしたらば、直ちに逃げられてしまう。ハエにはトンボのような視覚情報と行動の間にラグがないか、あっても極めて短い。このラグの差は判らない。

そもそも、脳みそは、ハッキリした解剖学、若しくは、系統発生的な見地からすれば、脊椎動物に存在するも

ので、無脊椎動物の昆虫類には存在していない。それでも、扁形動物のプラナリヤとか、頭足動物のある種や、ウミウシのような原索動物、それに、昆虫のような節足動物に見られるように、無脊椎動物でも。脳に似たような神経の塊り、神経索、神経束と言われるような組織が観察されてはいる。また、そのような組織では、他の組織が脳の働きをするように分化することを抑えてしまう抑制物質（タンパク質の一種で、*non-darake*、日本語では少しふざけた名前）が知られてもいる。そうであるならば、脳でないからと言って、無視することもない。その原始的な機能に、目指す面白いものが沢山潜んでいるのに違いない。

人間の目で見ても、或いは思い込みで観て、蟻の行列の所々で、蟻同士が向き合い触覚を触れ合いながら挨拶を交わしていることをよく見掛ける。何らかのコミュニケーションをとっているのだから、こういう言葉が判ると面白い。それにしても、昔の人は凄い。『ホタルよ来い。こつちの水はアーマイぞ。』と呼びかける。虫に日本語が通じる訳もない。それに、虫に甘い辛いが

判るのか。虫の欲望はどんなこと？ 食欲、性欲、独占欲、保全欲、快適な生活欲、…未だどんな欲望があるのだろうか。地上の虫は空を飛びたいのか。空を飛んでいる虫は水に潜りたいのか。水中の虫はもつと速く泳ぎたいのか。…他にどんな欲望があるのかが判ると面白い。知りたいことが一杯出てくる。人間の欲望なんか小さく見えるかもしれない。一方では、底知れない恐怖を常に感じているのかもしれない。人間はなんと鈍感なのだろうか。人間は恐怖感を余り持たないのかもしれない。虫のようにもし予知能力が優れているとすると、どうなるか。ストレスが強すぎて、短命な生物となってしまうのではなからうか。それに、予知能力が移入されると、人間は夢を見ることがなくなってしまうのではなからうか。そうなる、人間が支配力旺盛な世界を形成するのか。それとも、平等を望む世界が出来るのだろうか。そのとき人間は生きるということをどのように考えるのであるか。只々動き、繁殖し、寝て、食べて、死ぬ。それだけでよい人間となると、脳みそは昆虫化してしまうのか。…あんまり昆虫の脳の勉強をするのは止めておこう！

絹の話 (33)

「アトリエトレビ」今 泉 雅 勝

寿司屋ののれん

絹製品を販売していると色々な癖を持ったお客様に出会います。全国共通していちばん多い癖が、親指と人差し指でストールや洋服の端を摘んでチリチリと撚るのです。不思議に3〜5品続け様にそうします。中にはギュッと握りしめてパット離す人もいます。その目的は生地との感触、特に柔らかさの具合を調べているのでしょう。つむぎ糸以外のサラつとした少しシヤリ感の有る絹に出会うと、その人達は少し落胆した面持ちで無言で去って行く人（すかさず声をかけても取りつく島も有りません）と、「アッ！固い」と小声を出す人と半々位でしょうか。声を出した人の半数の方が「これは絹ですか？」「素材は何ですか？」と聞いて来ます。「絹です」と答えると、やや困惑した様子で立ち去る方と、「絹は柔らかい物なのにどうしてこんなにシヤリ感の有るのですか？」「チクチクしませんか？」と質問して来る方がいらっしやいます。ここぞとばかり、絹糸の作り方の色々を説明し始

めるのですが、二言三言の内にそそくさと帰られてしまいます。この様な方々に絹の事を少しでも解って頂いて一人でも多くの愛好者を増やし、健康と省エネ、環境保全に役立つことを、お伝えしようとお客様に合った語彙と話術を駆使してお話しようにも、どうにもなりません。この様な出合いを私は「寿司屋ののれん（暖簾）」と言っています。（これは当店だけの隠語で他者には通じません）

「寿司屋ののれん」とは私共の店が東京の赤坂一ツ木道りにあった時、店を閉めて近くの小さな居酒屋に夕食を食べに行っていました。そこに脇役俳優の殿山泰司さん（亡くなられてかなりになります）がロケに行かない日は殆ど2〜3に人とチビチビやっているのが常でした。いつしか気心が知れて、話に花が咲く様になり、その話の中で、昔、寿司は銭湯の脇などの屋台で3〜4個風呂上がりにパット摘んで、屋台の暖簾でチリチリと指を拭いて出て来るのが普通で、屋台寿司は手で摘んで真ん中の一つある醤油皿に手を延ばして共同で使い、お絞りもなにも無いので、暖簾で指を拭く、この仕草が粹なのだとは言うのです。美味しい店の暖簾は乾いてバリ

バリになっていくから直ぐ判る：この様な話にいたく感心したので、後日、自店でこの様な仕草をする人を、いつしか「寿司屋の暖簾」と云う様になったのです。

〈繭作って絹知らず〉

繭を展示していると、60才以上の方々から幼少の頃自宅で養蚕をしていて、それを手伝った事を懐かしく思う話をよく聞きます。おばあさんが糸を細いでいた話等：しかし話す人も、糸を細いでいたのか、生糸として上げていたのか判らない人が殆どです。

絹は糸の作り方で風合や感触、艶も天地ほどの違いがあり、値段も違います。繭は部位によって余すところなく上手に加工してきたのです。

戦前の日本の繭生産量は世界一でした。輸出総額の43%が絹と云う年も有り、全国至る所で盛んに養蚕が行われて、生活の一部として親しまれて来ました。

ところが絹は古来では税として納め、近代は換金作物として作り、儉約、華美禁止などの為、一般の人の生活の中に浸透しませんでした。アメリカの様に絹をストッキングにして履こうなどと云う事は思いもよらない事

で、戦後になって丈夫で安価な化学繊維に移行してしまったので、絹を一般の人が身近に使う機会が有りませんでした。戦後の混乱が一段落し、世間が安定して来た昭和30年代、呉服は財産の象徴の一つでしたので、絹の呉服が沢山売れました。ところが経済成長共に、女性の職場進出が著しく、社会構造の変化も相まって、買い込んだ着物を着る機会が少なくなつて、箆笥の肥やしを作つて今日に到っています。従つて多くの人は繭には親しみを感じても、絹をよく理解していません。チリチリ指で触る人は「絹はツルツル柔らかく艶のある物」と思い込んでいる様で、それを確かめる為に触る様です。残念ながら「寿司屋の暖簾」の方々にはなかなかお買い求め頂けていません。

〈絹の大衆化への試み〉

着物を作る繭を作るには繊細な管理が必要です。これとはとても大切な文化の一端ですが、一方、その様な労力を使わない繭を安く大量に国際分業で製造し、健康によい絹の下着や、寝具、壁材など作つて絹が高級な物、高価な物と云う呪縛から解放される事を願つてやみません。

物理学者と詩歌の世界 (43)

一石

アーノ・ペンジアス

アーノ・アラン・ペンジアス (Arno Allan Penzias, 1933-) は米国の物理学者。ドイツのミュンヘンに生まれた。6歳の時に、ナチスによる迫害からユダヤ人の子供達を外国へ避難させる「組織活動」によってイギリスに逃れた。アーノが脱出した6ヵ月後に両親もドイツを離れ、1940年に一家はアメリカのニューヨークに移住した。1946年にペンジアスはアメリカに帰化。1954年にニューヨーク市立大学シテイクレッヂを卒業、1958年にコロンビア大学で修士号を、また1962年に博士号を得た(参考資料1)。

ペンジアスはニュージャージー州のベル電波研究所に電波技師として就職し、そこでロバート・W・ウィルソン(注1)とともに、電波望遠鏡(注2)の雑音を測定するための超高度度低温マイクロ波アンテナの研究に取り組んだ。1964年、二人は正体不明の電波ノイズに出会ったのである。あらゆる努力にもかかわらずこの雑音を除去することはできなかった(注3)。その後これは天の川銀河外の全方向からほぼ等的にやってくる電波(マイクロ波)であり、それは宇宙の誕生に際して発生した原初の光の「残光」(宇宙マイクロ波背景放射、Cosmic Microwave Background)

d Radiation...CMB)であることが明らかになった。彼らは宇宙の謎を探ろうとしていたわけではなく、「CMB」なる電磁波が宇宙論の大きなカギを握っていることさえ知らなかったという。

結局、ペンジアスらの捉えた電波は、ガモフの予想したビッグバンの名残の電波(CMB)であることが明らかとなった(注4)。この発見は現代の宇宙論の根幹をなすビッグバン仮説の正しさを裏付けるものであった。その功績により、ペンジアスとウィルソンは、1976年ノーベル物理学賞を受賞。二人はその前年にヘンリー・ドレイパー・メダルを受賞している。

注1…ロバート・ウッドロウ・ウィルソン (Robert Woodrow Wilson, 1936-) は、アメリカの電波技師、天文学者。ライス大学で学び、卒業後はカリフォルニア工科大学で学位を取得した(参考資料2)。ペンジアスとの共同研究でCMBを発見した。

注2…1932年にアメリカ人のカール・ジャンスキーが天の川からの電波を初めて観測したことがきっかけで、電波望遠鏡が天体観測に使われるようになった。電波望遠鏡の登場がこの宇宙をより詳細に観測するために決定的な役割を果たすことになる。電波望遠鏡が実用化されてからは、非常に幅広い波長帯の電磁波を使って、目で見える天体だ

けではなく、目では見えない宇宙全体を観測することが可能になった。その電波望遠鏡による20世紀最大の発見は、ペンジアスらによるCMBの発見といえる。

注3

ペンジアスらが観測したノイズの強度は天の川銀河からの放射よりも強いものだったため、二人はアンテナがニューヨークあたりから飛んできた電波をキャッチしたのではないかと考えた。しかしそうではなかった。その雑音はあらゆる方向から飛んできていたのである。そこでアンテナ内部で異常が起きている可能性もということと調べたところ、アンテナに鳩の糞(論文の中では「白い誘電性の物質」と記している)がたくさん付いていた。これも雑音の原因になりうると考えた二人は溜まった糞や巣を掃除したが、ノイズはいっこうに消えなかった。考えられる干渉源は全て取り除いたにも拘らずノイズは消えなかった。そこでペンジアスがMITの友人に相談したところ、その友人からプリンストン大学の宇宙論研究者R・ディッケ、J・ピーブルスらによって書かれたばかりの論文を紹介される。その論文は、宇宙創成の名残としてマイクロ波領域の熱雑音が宇宙全体に満ちているはずだと指摘していた(すでに1940年代にG・ガモフ、R・アルファール、R・ハーマンらが予言していたことをディッケらは

全く知らなかったという)。ペンジアスはすぐにディッケに電話をかけ、「自分たちがそれを見つけた」と告げた。まさにこの時、ディッケのグループは、その背景放射を観測するべく作戦会議の最中だったのである。14年後、ノーベル賞がペンジアスとウイルソンに与えられたとき、ガモフは既に亡く、ディッケも受賞を逃した。

注4

CMBは1946年にビッグバン宇宙論を唱えた理論物理学者G・ガモフによって予言されていた(参考資料3)。ガモフは、超高温の宇宙が放っていた光は、その後の宇宙の膨張によって波長が引き延ばされ、現在も温度が5Kのマイクロ波の形で宇宙に漂っているであろうと予言した。ペンジアスらが観測した「残光」の温度は3.5Kであった。こうしてCMBの発見がビッグバン宇宙論を裏付ける証拠と見なされるようになったのである。

参考資料

- 1) Wikipedia, the free encyclopedia · Arnold Allan Pencyl as
- 2) Wikipedia, the free encyclopedia · Robert Woodrow Wilson
- 3) 三河アララギ、第59巻、第2号、P40

短歌に詠まれた茂吉―あるいは茂吉を詠んだ歌人―

「月虹」 鮫島 満

十一 堀内通孝 1

堀内通孝は大正十年に「アララギ」に入会、昭和二年から茂吉に師事した。昭和十六年に茂吉の「序」に祝福された第一歌集『丘陵』を八雲書林から出して歌壇に迎えられる、山口茂吉、佐藤佐太郎、柴生田稔とともに茂吉門下の逸材といわれた。堀内は「巻末記」に茂吉との出会いを「（アララギの）発行所の二階で、斎藤先生に歌を見て戴き、長崎以来始めて復活された最初の『童馬山房選歌』に加へていただいた」と書いている。

すこやかになり給ひきと思ふだにこころは和ぎぬ君
がかたへに 『丘陵』昭和十三年

この歌が作られたころ堀内は銀行員として名古屋に転勤していた。「童馬山房」と註があるので所用で上京したのであろう。茂吉の日記に「明日ノ会食ヲ約束ス」（四月十五日）、「マール食堂ニテ山口、堀内、佐藤三君ト会食シタ」（四月十六日）とあるこのことかと思われる。初・二句は茂吉が一月に二週間余発熱のために臥床して

いたことにかかわる。

引馬野にほひし榛原いかにかと雪みだる日に出で
て来にけり 『丘陵』昭和十三年

すでにして野分の風かあかあかと枯れし犬蓼のなび
くを見れば

安礼之崎そこと思へば磯浪のあらきわたりに幻に見
ゆ

萩の葉は黄いろになりて衰へぬ引馬野を見む山の上
にて

この一連の歌にみる行動は、『万葉集』巻一・五七「引馬野にほふ榛原いり乱り衣にほはせ旅のしるしに」の「榛原」は「萩原」であろうとする茂吉の依頼による。茂吉は、当時名古屋に住んでいた堀内に、この歌が詠まれた時期の引馬野の萩の状態を調べるよう頼んだのである。しかし、このころまだ萩の花が残っていないかという茂吉の期待に反して「萩の葉は黄いろくなりて衰へ」ていたのである。結果について堀内はのちに、「土地の病院長である今泉忠男君（御津磯夫）夫妻の御案内でその付近を歩き、幾本かの萩も採集し、これは標本にして先生にお届けした」（『北明』後記）と書いている。

秋さめの音する部屋にやや暫しまどろむ君がへに坐

りるき

『丘陵』昭和十四年

この歌の「部屋」は、茂吉の日記に、鹿児島からの帰途に名古屋に立ち寄ったことが記されているので、その旅館であると思われる。

あづさゆみ引馬の野辺にしたがひて歩まむ時しまさに近づく

『北明』昭和十六年

たふとくも老いたまひける人のへに旅寝む幸は妻も言ひ出づ

かかる日を吾は待ちけり生くる日のよすがと思はむその日過ぎなば

茂吉と会う約束の日を待つ心躍りを詠んでいる。本誌二〇一一年十月号から二〇一二年二月号にわたって書いた「茂吉と御津磯夫」においても触れたが、右の歌の背景を辿ってみたい。

堀内は『北明』の後記に、前年の調査の時以来「先生に实地に引馬野を見ていただくといふのが私のかねての念願で、それが昭和十六年の秋実現した訳であつた」と述べている。

右の三首はその日が近づいたころの歌である。二首目からは作者がその喜びを妻に何度も語っていたことがわかる。

次の歌は、茂吉と引馬野を歩いた当日の作である。

岸草のすがれの上に三人立ち海苔うごきゆく水を見おろす

万葉の頃の萩をば君は説く小止みとなりし路にしやがみ給ひ

引馬野も御津の磯辺も見えなくに雨の頂にしはし立ちつくす

雨の山につひに来ましし君がためこの深き靄しはしだに退け

一首目の「三人」のもう一人は作者が「今泉忠男君の案内で实地を踏査した」と書くところの今泉忠男である。三、四首目の「雨」について作者は、「その内雨となり海岸近くの田圃道を歩いてゐる頃はひどい土砂降りであつた。……この雨では全然視界がきかないから、登つても意味がないと思つたが、……先生の選択におまかせした訳だが、『君登らう』といふ事になり」「山上は雨靄で全く視界がなく残念であつた」と書き、茂吉の実証のための執念に驚いた旨のことを書いている。

以上のいきさつは茂吉の『万葉秀歌』にも、「引馬野」が三河の御津付近であることを初めて特定した御津磯夫（今泉忠男）の『引馬野考』にも書かれている。特に後者は説明が詳しい。

楽しい時間 9

山本紀久雄

2013年6月30日

6月も第二土曜日の午後2時少し前、京浜東北線の蕨駅西口階段を降りる。左方向に曲がると角に「蕨駅開設記念碑」が鎮座している。これは蕨駅が明治26年(1893)に開設されたことを記念して建てられ、関東大震災で倒壊した風格ある碑だが、この前を通る際には日本の鉄道開拓者に敬意を払いお辞儀する。頭を下げるもうひとつの理由は、この碑は根府川石で造られていて、当家の墓石と同じなので、何となく好感をもっているからである。

ところで、5月後半から6月にかけて株式市場の動きが激しい。急上昇したかと思うと、急反落する。まるでジェットコースターのように、この一要因と言われているのが「HFT」。正式にはHigh-Frequency Tradingハイ・フリークエンシー・トレーディング、「高頻度取引」である。HFTは、欧米の大手証券会社やヘッジファンドなどによって、数年前から行われている証券取引手法で、日本でも外国人投資家の要望を受け、2010年1月から導入した。高速演算が可能な大規模(スーパー)コンピュータによる自動売買(アルゴリズム取引)の一つの究極の姿といえるが、ミリ秒(1/1000秒)単位で、頻繁に売り買いを繰り返す、小額の取引益を積み重ねる手法のため、株式市場は常に不安定状態となる、というより不安定をつくり続けることで、巨額の儲けを得ようとしているのだと推測している。

ところで、この「不安定」状態と反対の極にいたるのが、一般人の生活である。普段の暮らしは落ち着きがあることが大事であるし、日常が「安定」した状態である時に、多くの人は平和であると感じるはず。毎朝、大体、同じ時間に起き、朝食を同じタイミングで採り、勤め人は同じ時間帯に会社に向かい、夕方、家に戻ってくるのもおおかた同じ時刻で、いつもと同じ奥さんの顔を見ると、ホッとしてみつくりする。それが自宅の玄関ドアを開けたら、毎日、奥さんが変わっていたらどうか。家の中には不安定で、落ち着きがなく、家であつくりくつりがないだらう。つまり、我々の生活はある一定のパターンを持った状態が望ましく、株式市場とは逆の関係にあるのだ。

このような不安定感はいいとびあ辻照子先生の「マナー&料理教室」でも同様に感じる。というより、安定とは異なるもつと別な表現がふさわしいかも知れない。

辻先生から発する雰囲気はやさしい眼差しと、それにフィットした眼鏡から発するが、特に、今日は素敵に思えたので「眼鏡を変えましたか」と尋ねると、「いいえ、いつもと同じですよ」という。確かにいつもと同じ眼鏡であるが、いつもとは違うように感じる。

人間には、その人自身が意識し発するものと、内部に存在しているものが自然に顕れてくるもの、この二つが同居している。だから、他者から見ると、その時の条件・状態によって積みだす度合いが異なるから、相手を受け取る印象が違ってくるが、そのことを表す適切な言葉が見つからないと思っていいたら、今日の辻教室新人が穏やかに麗しい頬笑で語る。

「みどり監督に誘われて参加しました。メニューはシンプル・つくりやすく・美味しく、先生から伝わって

る雰囲気がとても素敵で、楽しい時間を過ごせました」成程と納得。

さて、和田さんがつくった今日のワイン資料には、「サンライズ、カベルネ・ソーヴィニヨン（チリ）ミディアムボディ」と書かれている。

懐かしい。このワインはビーニ・コンチャ・イ・トロ Vina Concha Y Toro 社のもの。コンチャ・イ・トロ and トロ・雄牛という意味だが、ここへ2011年5月に訪問した。サンチャゴ郊外のチリ最大手ワイナリーで、このガイドツアーに参加したのだ。

広い大きな門を入って、最初に創業者のドン・メルチヨール・コンチャイトロ氏の館を見る。石造りの立派な建物で庭も池もある。23haの広さだという。次にぶどう畑に向かう。チリは葡萄の木の種類という観点からフランスを凌ぐといわれている。それは、ヨーロッパに壊滅的な被害を与えたフィロキセラ、アブラムシの一種であるが、



この発生で、当時のヨーロッパでは葡萄品種に耐性がなかったため、ほぼ全滅という事態に陥ったが、チリはフィロキセラに全く犯されず、フランスから導入された苗木が現在も子孫を残しているからだという。この地の気候は地中海気候で、土地は痩せ、夏は長く、水は少ないが、葡萄には大量の水はよくないといわれている。その理由は、水が少ないと葡萄の実にだけにエネルギーを集



と「パイナップルですよ」という。ちよつと疑問に思ったが、しかし、素晴らしい味わいで美味い。さすがと感ましている。次は地下室の樽貯蔵庫に入る。樽が大量に詰まっている。すごいなあと思つめた途端、ガイドが明りを消し、真つ暗闇の世界となり「ここは悪魔の部屋です」という。ワイナリーで働く労働者が、貯蔵庫に入るとワインを飲むのを防ぐため、蔵には悪魔が宿っているという噂を広めるなどして守つた経緯を語り終えると、再び明かりが灯るが、そのストーリー性あるガイドの語りが素晴らしい、今まで数多く訪問したワイナリーのどこよりも上手だと感じる。次に再び、赤ワインの試飲、これも果物の香りを尋ねるがよくわからないが、美味い。そこで、売店でカルベニソービニオン7ドルを買う。安い。試飲したグラスもいたたいて、割れないように大事に自宅に持ち帰って、以後、ずっとこのグラスを大事に使っているが、とうとう割れてしまった。とても残念である。

めてよいブドウができるため。さらに、葡萄の木を大きくすればよいというのではなく、小さく育て、葡萄の実にエネルギーを集中させることが重要ポイントだというガイドの解説、これはボルドー大学の醸造学教授に聞いた内容と同じであり、なかなか勉強しているなあと思う。次はシャルドネの試飲。香りでのどのような果物を想像するか聞かれたが、よくわからないので黙っている

贈呈誌

秋田アララギ 七月号

東海林 諦 顯

几帳面かいい加減かわれを見て評する人の思ひにまかせむ

安 濃 ルリ子

ひしめきて家の建つ合ふ東京かどこもプランターに花を育む

秋 楸 六月号

鬼 頭 正 子

ふるふると豆腐が揺れる湯気の中マンネリレシピ鍋料理また

杉 山 千 里

それとなく断りひとり帰りきぬいぬふぐり咲く古き裏道

愛媛アララギ 七月号

西 村 栄 子

大人達に周り囲まれて立つ男の子たった一人の入学式けふ

正 木 智 沙 子

三十年前わが町に出来しスポーツ公園今朝も歩きぬパーキンソンのわれ

鹿児島アララギ 六月号

南 和 男

花吹雪かがやきながら峡谷の底へ底へと吸ひ込まれ行く

浜 畑 松 枝

ふくらみて紅色なせる石楠花は音なき雨のしづくを落す

高知アララギ 六月号

楠 瀬 兵 五 郎

健やかと言はばいふべし痛みなく九十一歳バナナをくらふ

多 賀 一 造

早春の空に伸びたるクレインの先が宇宙を引つ掻き廻す

冬 雷 七月号 川 又 幸 子

思ひ切りバス停二つ歩み来つカットせる髪風にまかせて

小 宮 守

舌にのせて唾液に溶かし飲む薬こよひ食後の一人の娯楽

終 七月号 勝 木 四 郎

時を惜しむ思ひいつしか淡くなり咲くしろたへの木蓮のまへ

南 部 輝 子

病む夫と楽しむわが庭春たけて今朝は聞きたり三光鳥を

群 山 六月号 麻 生 慶 太 郎

早春のしづけき町の橋ゆくに川の流れはいたくさやけし

菅 野 福 江

津波後の荒寥とせる田に畑にそよげる草はなべて実を持つ

榎 の 木 六月号 山 田 久 二

帽子とり礼してくれし生徒あり中学校前の歩み楽しも

杉 山 永 代

彼の地震よりちやうどふた年わが庭の馬酔木今年も白花綴る

穂 の 原 六月号 荒 川 榮 子

十日程早く梅雨入り何もせずだた悶もんと時の過ぎゆく

俳 誌 か さ ね 六月号 川 井 素 山

磯桶の波間にゆれて海女の笛

咲くを待ち咲けばすぐ散る花惜しむ

安藤 虎醉

俳誌かさね

七月号

佐藤 喜仙

甲斐駒を映し澄みきる代田かな

田島 昭久

池中の木に蛇巻きて餌を狙ふ

斎藤茂吉記念歌集 第三十九集 (四二一首より)

文明に及ばざりしと嘆きつつ父は自らの碑に眠りある

鳥取 足立 早苗

オガタマの若葉に一つ卵ありやがて飛ぶらむミカドアゲハと

東京 今泉 由利

書きとめし日記がわたしの解ほぐし函はこ今日より明日へ思いを繋ぐ

茨城 上野 八重子

生れてより百三十年かわが町に茂吉したしく光をはなつ

山形 加藤 由起子

赤光院となられ六十年の春いまはつかなる翁草はも

神奈川 今野 寿美

「赤光」発刊一〇〇年記念

全国短歌コンクール入選作品集より

中学校――

手術する祖母へ手渡す勇気の手紙私と弟心をこめて

上市市立南中学校 一年 伊藤 千緒里

「ありがどな」雪かき終わり家族からその一声でつかれ忘れ

大蔵村立大蔵中学校 二年 佐藤 宥紳

緊張の静寂の中鉛筆を擦れた紙の音のみ響く

上市市立宮川中学校 三年 木村 洋輝

帰り道雪降りだせば道がない歩く自分の足跡がつく

南陽市立赤湯中学校 一年 青木 捷

会いたいと思ってくれる友達がいてくれる事キセキにちかい

東海市立架屋中学校 一年 三ツ石 朝希

・惠贈

アララギ派叢書第二十一篇

「寒色暖色」長森 聡 歌集 現代短歌社

偏りてゆく感覚を自覚す徹底しようその偏りに

わが命宿りし母の胎内にすでに目覚めぬわが感覚か

自らを浄むる仕事となり得るや絵を描く自浄作用にたのみむ

軌道修正図れる脳の新鮮さ願ひて青き絵具を出いす

わが好むこの色彩は今日の絵の敵なりたり敵と闘はむ

子規の短歌革新とアララギの歌人 (13)

佐藤 喜仙

(三) 歌よみに与ふる書

第二回の要旨は以下の項目の通りである。

- ① 古今集否定
- ② 紀貫之は下手な歌よみ
- ③ 古今集と新古今の比較
- ④ 香川景樹の歌について

① 古今集否定

「貫之は下手な歌よみにて『古今集』はくだらぬ集に有之候」第二回の冒頭である。だが子規も一時は古今集を崇拜していた一人であるが、一旦目覚めると「三年の恋一朝にさめて見れば、あんな意気地のない女に今まではかされてをつた事かと、くやしきも腹立たしく相成候」と手厳しい。古今集は駄洒落か理屈っぽい歌ばかりである。そんな古今集を二百年三百年たつてもその糟粕を嘗めているのは不見識であると断じている。

② 紀貫之は下手な歌よみ

古今集を選進した貫之の歌には、歌らしい歌は一首も見られないと云えるが「川風寒み千鳥鳴くなり」歌は良い歌だと思う。「空に知られぬ雪」は駄洒落、「人はいさ心もしらず」の歌は浅はかな表現であると述べている。

③ 古今集と新古今の比較

「古今集以降にては新古今ややすぐれたりと相見え候。古今よりも善き歌を見かけ申候」と書き出しているが、善き歌も指折って数えられる位のものであると指摘している。新古今調の代表作家として「定家」を取り上げ、定家の歌は上手か下手か訳がわからないが、歌風の絢爛、巧緻なところもてはやされる由縁であるとし、狩野派の画師に比すれば探幽たんゆうと似ていて相方とも錬磨の力はあるが、傑作はないと強調している。

④ 香川景樹の歌について

景樹は江戸後期の国学者であり歌人である。古今集崇拜の立場を取り、歌は平易な言葉で詠むべしとして「新学にいがく異見」を著し、万葉鼓吹の賀茂真淵まゆみに対立し、真淵の弟子の村田春海や加藤千蔭らと論戦をした。子規は、景樹の歌は古今貫之崇拜で俗な歌が多いが中には貫之よりも善い歌がある。それは景樹時代には歌道が進歩しており、従って景樹に善い歌があると結んでいる。

「鍼の如く」 其の四 夏 目勝 弘

(七月十七日から八月六日)

「詞書」七月十七日、構内の松林を徜徉す、煤煙のためなればか、梢の月いたく枯燥せるが如きをみる

○油蟬乏しく松に鳴く聲も暑さが故に囁れにけらしも

「詞書」かゝる時女どもなればみなくさめきあへるが、ひとり我がために撫子の手折りたるをくれたれば

○牛の乳をのみてほしたる塚ならで挿すものなき撫子の花

「詞書」塚に活けたるまゝにして

○なでしこの花はみなながらさきかへて幾日へぬらむ水減りにけり

○なでしこはいまは果敢なき花なれど捨つと言にいへばいたましきかも

「詞書」朝のうち必ず一しきりはげしく咳出づることありて苦しむ

○暁の水にひたりて鳴く蛙涼しからんとおもひ汗拭く

「詞書」夜になれば我がためのみは必ず看護婦の来て轡をつりてくる、が例なり

○轡つるとかやつり草を外に置くが務めなりける我は瘦せにき

「詞書」僅かに凌ぎよきは朝まだきのみなり

○蚤くひの趾などみつゝ水をもて肌拭くほどは涼しかりけり

(手紙に…腕や脚の毛がそよりと動いても蚤の動いたのが知れます…また十五匹とって一寸楽になりました。また別の手紙には、五十匹とったとも書いています)

「詞書」二十三日、久保博士の令妹より一茎の桔梗をおく

らる、枕のほとり俄かに蘇生せるがごとし

○さゝやけきかぞの白紙爪折りて桔梗の花は包まれにけり

「詞書」目をつぶりてみれば秋既に近し

○白埴の瓶に桔梗を活けしかば芽えたる秋は既にふゝめり

「詞書」我は氷を噛むことを好まざれども

○暑き日は氷を口にふくみつゝ桔梗は活けてみるべからし

「詞書」構内にレールを敷きたるは濱へゆくみちなり、雑草あまたしげりて月見草とところくゝにむらがり一夜きりくすをさく

○きりくすきこゆる夜に月見草おぼつかなくも只ほのかなり

○白銀の鍼打つごとききりくす幾夜はへなば涼しかるらむ

「詞書」八月一日、病棟の蔭なる朝顔三日ばかりこのかた漸くに一つ二つさきいづ

○嗽ひしてすなはちみれば朝顔の藍また殖えて涼しかりけり

「詞書」三日夕、整形外科の教室の蔭に手をたて、おびただしく絡ませたるをはじめて知る、餘りに日に疎ければ

○朝顔の赤は萎まずむき捨てし瓜の皮など乾く夕日に

「詞書」四日

○あさがおの藍のうすきが唯一つ縋りてさびし小雨さへふり

○「詞書」彼の垣根のもとに草履はきておりたつ

○朝顔のかきねに立てばひそやかに睫にほそき雨かゝりけり

「詞書」六日

○かつくも土を優よひたる朝顔のさきといへば只白ばかり(一首一首に、てる子への思いが感じられる)

「歴代天皇御製歌」(十四)

貫名海屋資料館

『天武天皇』(第四十代) 在位六七三年(五十二歳) 一六八六年(六十五歳)

天武天皇は、舒明天皇の第三皇子。天智天皇の実弟にあたる。母君は、女帝皇極、斉明天皇。

内政の秩序を整え、「国史編纂」に意を注がれた。後に撰録される「古事記」は天武天皇の意向を反映されたもの。
天武天皇の大海人皇子の時代、額田王を妻とし、十市皇女を儲けた。後に、額田王は兄の中大兄皇子の妃になり、不和の原因となる。

むらさきの にほへる妹を 憎くあらば 人妻ゆえに 吾恋ひめやも

「万葉集」卷一 21

天智天皇が蒲生野に遊獵に出掛けたおり、額田王が、大海人皇子に「野守は見ずや 君が袖振る」と歌ったのに答えた歌。

み吉野の 耳我の嶺に 時なくぞ 雪はふりける ひまなくぞ 雨ふりける その雪
の 時なきがごと ひまなきがごと くまも落ちず 念ひつつ来し その山を

「万葉集」卷一 25

吉野の山道を、沈痛にして憂鬱、晴れない落ち込んだ気持で来ましたよ。

「歴代天皇御製歌」(十五)

貫名海屋資料館

『持統天皇』第四十一代 在位六八六年(四十二歳)―六九七年(五十三歳)

持統天皇は、三十八代天智天皇の皇女、鸕野讃良。四十代天武天皇の皇后であられ、天武天皇が崩御されると持統天皇となられた。七〇二年崩御。天皇の火葬のはじめての例となられ、天武天皇と合葬された。

六八九年、飛鳥浄御原律令の最後の令二十二巻が施行され、六九〇年には、太陰暦が採用された。柿本人麻呂が活躍し多くの歌を残した「万葉集」は、持統天皇の御代。

春過ぎて夏来^{きた}るらし白栲^{しろたえ}の衣乾したり天の香具山

(万葉集 巻第一)

衣替えの季節がきたのだなあ！

不聴^{いな}と言へど強ふる志斐^{しひ}のが強語^{しひがたり}このころ聞かずて朕恋ひにけり

(万葉集 巻第三)

もう聞きたくない、と言っているのに、無理強してきたのだったけれど、このころまた聞きたくなかったなあ。

「氷魚」のことから (151) 岡本八千代

白い紫陽花もうす紫に変わってきた。今日降る雨雫が光りつづも——。今年も玄関に御津先生の「雨の日は傘さして来よ」の短冊を飾る。そして、「傘にふる雨も楽しと傘さして来よ」をひとり口ずさむのであった。

単純化の中になんと抒情のこめられた歌か。アララギの真髓を感じる。

子規の小説「曼珠沙華」四の続き。

四・花籠を提げた少女は、家への帰り道に一つの縞蛇を見つけたがにげるのを見送って、形ばかりの門へ入った。

・戸口には十歳を少し超えたぐらいの童が遊んでいた。少女はその側に立って、童のすることをみていた。

童は、蛇を手に巻きつけたり、解いたりして楽しんでた。——何の不思議はない。「蛇使いの子が蛇使いになる。医者の子が医者になると同じことだ」

「かえって慈悲が深いのである。」と。

・これは、死んだ女房が生きているうちに子の教育について、蛇のことについて夫に訴えた時の夫の答であった。

・少女と童は、姉と弟であった。

五・——玉枝（主人公の男）と女のこと。

・玉枝は、はじめ草枕に眠っていたが、やがて女の膝枕に「女が、少し顔を赤くして、自分（玉枝）の顔を覗きこ

んでいるように思われて、耳の処が燃えるように感じて来る」のであった。——女は泣いているのか、玉枝の頬に涙が落ちた。

・女は、「自分が不幸な境涯に生まれているとも、気は付かず。父親は恐ろしい者、母親は恋しい者、弟は可愛い者とより外に知らなんだ者」。かなわぬ夢とは思いつつも、ますます玉枝を恋い慕う気持が深くなっていった。

六・玉枝を恋しがったあの少女は、花売娘として描かれている。「桔梗、刈萱、千日紅は宜しゅう……」「尾花に女郎花は宜しゅう」「桔梗に紫苑に吾木紅……宜し……」などと言いながら、花を堆く盛った籠を背に負って。

・少女は、見る影も無い、胸も合わない、丈の短い脛もあらわに跣足のままで、力無さそうに町々を呼び歩いていた。この少女の名はみいさんと呼んだ。他の花売りの人たち、お谷さん、反齒の人、赤帯の人らの仲間から、みいさんは野村家の結婚の話を聞く。

・みんなと別れた後のみいさんは、いままで憂鬱な顔をしていたのに変じて凄味を眼と眉のあたりにちらつかせている。三人の姿が見えなくなると、少女は再び町の方へ引き返してきた。

はてさて、(七)からはどうなるやら、子規は少女の心理状態をうまくとらえていて、小説のテクニクもさすがのよに思う。

ことのはスケッチ (416) 今泉 由利

『グレート・ジャーニー』②

私には、何もなかったアルゼンチンで、それでも仕事をはじめ、アルゼンチン生れの二人の女の子を得、この子達に助けられつつ、私自身が地球の上で困ったことは、子供達からはすっかり取り除いてあげよう…私なりの全力を尽くしたつもりになっていたアルゼンチンでの生活。

○アルゼンチンと日本との仕事をするにあたり往復すると地球を一周したことになる距離を、飛行機に乗ったこと七十回か八十回か…。せっせと地球をまわったのだった。

その間、地上一万メートル程の位置より地球儀的に地球を見下し、宇宙的に、気象的に夜空的に宇宙を観察した。

アルゼンチンを発つと、アンデス山脈の山々を掠めチリに着陸。離陸して魚粉の匂いのペルーへ着陸。ボリビア。コロンビア。ベネズエラ。パナマ。メキシコ。マイアミ。ロスアンゼルス。ロッキー山脈を、太平洋を、やつとやつと羽田に着く。時差があり、何日かかったのか計算も出来ない。その都度のコースにもより、後に、この各駅停車みたいなのは無くなってしまうたけれど。今でも、とても遠い。日本での仕事も終え、そしてまたアルゼンチンへ帰って行く繰り返し。

○ブエノスアイレスから、「パン・アメリカン・ハイウエイ」をボリビア・ラパスまで走り抜けたことがあった。

途中、リヤマが赤いリボンをつけて群ている。日干しレングの屋根の無い家、ずつと車で走って、何にもない処を人が歩いていた。…今回「グレートジャーニー展」に展示されているような、ミイラ、手術のあとのある頭蓋骨、細工されている骨などの博物館。サボテンの木で出来た教会、織物、染物、低温で焼かれた焼物…南米文化に近付けた。

○コルドバの一つの山の頂上に、セリーナさんの別荘があり、毎年の一ヶ月に及ぶ夏休みを過ごした。

アルゼンチンに多い植物、見知っている植物、知るも知らぬも昆虫達、夜の空を埋め尽くす星々。一週間も続いて蝶蝶の大群が空を覆ってとんだこと。ツクツクという玉虫のような虫が、ポーと大きく光を放って飛んでいた。

馬に乗って、馬でゆくセリーナさんのあとを追う、コルドバの山を、川を…ガウチヨの生活にも分け入った。

土で出来た丸いパン焼窯が庭先にあり、きつと柳の木が生えているガウチヨウ達の庭で、牛の蹠の骨を投げ上げ、土に落ちた向きで興じるバクチ?をしていて、参加させて下さった。マテ茶を飲み飲み、ギターのリズムフォルクルーレの歌に、踊りに仲間入り。

つづく

編集室だより【二〇一三年 六月】

○卓球の練習をしている滝野川体育館の目の先、「不発弾」がみつかる。新幹線も京浜東北線も、付近一帯立入禁止。処理された。

○「花守」の一番はじめの客、間仲久子氏（画家、童話作家）との年中行事的、フランス料理の昼食会。話は尽きない。蔵駅の「辻照子先生の料理とマナー」教室の生徒になる。簡単に出来、各々の料理に合うワイン類のルーツを知り、マナーを知り：「楽しい時間」。

○友人、山下つや子さんの「天山飯店」にて会食。餃子、レバニラ、芙蓉蟹：美味しい。

○大台ヶ原に降る雨が、伏流水：宮川：酒米：山癡純米酒になるまでの手仕事…。映像を見ていた。

○東海道五十三次を伊勢街道を、自ら歩き「和菓子街道」を連載中の平松温子さん。ライターに加え、神主修業中です。この度「神の島沖ノ島」、藤原新也、阿部隆太郎著。この編集に携われ、神々しい本をお贈り戴きました。編集室に神様がいらして下さいます。

ご希望の方にはお貸し致します。お申し出下さい。

○王子北とぴあ プラネタリウム。今月は、南半球の星座。大小マゼラン雲、天の南極、南十字星…。私の半生以上を

親しんだ星々に出逢えた。

○神楽坂「えすばす・ミラボオ」画廊に於て、生井巖展。私の絵の先生であり友人であり家族とも思う。素晴らしい絵を描かれます。

○東京文化会館第一中会議室、山岡鉄舟研究会例会に参加。室正面、鉄舟直筆、六曲一双の屏風が広げられて「あーと声をのむ」。木下雄次郎氏所有。彼の見事な解説により、すごいことを知り始める。永富明郎氏「吉田松陰とは何者なのか」の発表もあり、吉田松陰との付き合いも始める。○半蔵門のFEDDEX社から、ニューヨークへ至急の書類を送る。二三日で届いてしまう。

○卓球にゆく小金井体育館への往復の道に、ブルーベリー畑がある。やつと実り、やつと購入。何と美味。

○月が地球をまわる楕円の軌道の、地球に一番近づく今日のスーパームーン。

○俳句の吟行、目黒の国立自然教育園。雨。雷。ウバユリ。ガマの穂の雄花。雌花。木漏れ日：。

○多賀神社参拝。イザナギのミコト・イザナミノミコト・クス古木、ムクロジ古木、子供の狛犬。

○KEEK公開講座。つくばエキスプレスに乗って。量子ビームで拓く惑星、地球科学。「中性子と放射光を利用して、地球や惑星の中身を調べる」。もう五年ほどにはなるか…、この講座に通い続けている。

和菓子街道 (82)

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

伊勢街道(5)

神戸宿の中心部を抜けて街道を直角に左折すると、「あま新」の看板を掲げた小さな店が目飛び込んできた。引き戸を開けると、粉だらけの手をした男性が奥から出てきて応じてくれた。五代目当主服部さんだ。

幕末から当地の名物だったという立石餅は、店のすぐ前の角にかつて立っていた伊勢街道の道標、通称「立石」に由来する。薪で火をくべて餡を炊き、杵と臼で餅をつくという完全手作りだ。なぜガスや電気を使わないのかと訊ねたら、「昔から薪でやってるから、それしか火加減がわからない」のだという。こだわりだとかそんな問題ではないのだ。

街道が廃れた今は立石餅だけではやっていけないため、廃業も考えたという服部さん。しかし、この餅の味を知る人達のやめないで欲しいと



細長くべたっとしたあん入りの焼き餅。

いう強い要望から、現在は週末だけ営業し、平日は他の仕事をしているそう。

素朴ででこぼこと不恰好、それでも甘くて、優しい味がする餅を噛みしめながら思った。この店を続けて欲しい。この味を残して欲しい、と。

◆あま新

住所：三重県鈴鹿市神戸2丁目5-21

電話：059-382-0309

お知らせ

▽八月号の原稿は、八月一日(木)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。郵便の休配(日曜、祝日)を考えあわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は毎月の三河アララギ誌と共に返送しますので、返信用封筒は不用です。

原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A
〒一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

編集後記

△私の家の庭にアカンサスの丈高い花が咲きました。見慣れない花ということ、時々名を聞かれます。御津磯夫先生のお宅のアカンサスを株分けして頂いてもう何年になるのでしょうか。先生のお庭にも咲いていることでしょうか。古代からの花ということで、受け継がれ、受け継がれて、今私の庭に咲いています。何か不思議な気がしますし、神秘さえ感じます。植物も動物も、もちろん人も個々の固体はなくなっても、何らかの形で、どこかで受け継がれて生き続けます。

御津先生を始め多くの三河アララギの先人の精神を受け継ぎ、これからも歌を詠み続けて行きたいと思います。

△六月に一周忌を迎えられた伊藤八重子さんの御家族から発行所にお志しを頂きました。お礼申し上げます。(平松)

三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。
◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができる。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月一日より、半ヶ年分一万円、一カ年分二万円の割で前納されたい。ただし、購読会員は、半ヶ年分二千元、一カ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様たちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができる。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十五年七月二十五日印刷 第六十巻 第八号
平成二十五年八月一日発行 定価 六百元

編集部

岡本 八千代・小野 可南子・夏目 勝弘

発行人

平松 裕子・山口 千恵子

発行所

今泉 由利
三河アララギ会

〒一四一〇〇二二
東京都北区王子本町一の二六の六A
TEL (〇三)五九二四一・二〇六五
振替口座 〇〇八三〇一六・五六三三九
E-mail yuri88@cronos.ocn.ne.jp
Homepage <http://maizumiyuri.jp/>

印刷所

株式会社 桜 創 美